

巻頭言

「試行錯誤のすすめ」

取締役常務執行役員 技術本部長

森 拓也

建設業を取り巻く環境が大きく変わろうとしている。欧米先進国がそうであったように、わが国においてもかつてのような膨大なインフラ投資は期待できず、先行き不透明な状況を迎えている。従来のような右肩上がりの事業量が期待できない中、建設業に求められる技術もまた変化していくことは必然である。求められる技術は何なのか、すでにいくつかのキーワードは明らかである。省力化、更新・補修技術、高耐久、環境負荷低減……。これらの社会的要求に対して、ピーエス三菱はどのような技術を将来に向けてアピールしていくのだろうか。当社の存在意義に関わる重大な課題である。

新たな技術を産み出すことは容易なことではない。失敗を繰り返すことも珍しくない。しかもその技術は、さまざまに環境が変化する現場において、きちんと実現することができる技術でなくてはならない。さらに、新しい挑戦には課題がつきものである。実施工を繰り返しながら、これらの課題をひとつずつ解決し、より競争力の高い技術へとブラッシュアップしていく努力が必要である。

建設業における技術開発は、研究開発部門だけの業務ではなく、現場を含めた全社で推進していかななくてはならないものである。技術開発もまた総力戦なのである。

波形鋼板ウェブP C橋の開発などで当社とも関係の深い早稲田大学の依田照彦教授は、錦帯橋の研究者としても著名である。錦帯橋は数十年ごとに建て替えられるのであるが、依田教授によれば、その設計図は毎回まったく同じではないという。その時々、の棟梁によって、明らかに設計図が異なっているとのことである。新しい棟梁は、過去の図面を見ながら、先輩棟梁が何を考え、どう解決しようとしたかを推察し、自分なりの新たな“答え”を探しだしたに違いない。それぞれの棟梁の考え方や時代背景によって、構造物が変わるということである。技術の“答え”はひとつだけではなく、技術者が真剣に考え、試行錯誤した結果のひとつひとつが“答え”と言えるのではないか、あらためてそう思うのである。

今回の技報第13号には、39編の記事が掲載されている。ここには、技術開発の場面で、あるいは現業の設計や施工の場面で行われたさまざまな試行錯誤が詰まっている。そのひとつひとつがピーエス三菱の無形の財産である。

是非一読して、われわれの仲間が試行錯誤した足跡を辿ってもらいたい。肩に力を入れる必要はない。ぼんやりと眺めるように読むところから始めてもらえばよいと思う。そんな些細な取り組みが個人の技量を高め、ひいてはピーエス三菱としての技術力向上に繋がるのである。さらに、マニュアルだけではなし得ない、真の“技術の伝承”も可能となるのではないか、そんな効果を期待している。

2015年8月